

---

# おひさまsummer

詩代 歩溜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おひさまsummer

### 【ZINE】

Z5909Z

### 【作者名】

詩代 歩瀬

### 【あらすじ】

13回目の夏をむかえようとしていた千歳。

いろいろあって、孤独だと感じることが多くなっていたある日のこと。

「ぴーなっつ」

わけのわからない声が聞こえて・・・

## プロローグ（前書き）

大切な人と過ごす夏。

1秒でもいいから一緒にいたいんだ。

1秒じゃたりないんだけどね。

## プロローグ

太陽出てるね。

今日は畠のばずなのに。

天氣予報士さん殘念。

でも私は嬉しいな

昨日は、明日は雨なんだ。」「です」いかかりたたのに、

今、晴れててこんなに嬉しいのって天気予報を外してくれたおかげ  
じゃないかな。

最初から晴れて分かってたら」なんに嬉しくなかつたはず……

まあ、でも、晴れたからこそ何があるわけじゃなしんたけどね。

お空の上で喜んでるあなたを想って私が勝手に喜んでるだけだよ。

それが余田で、田だねー。

「コースのどこでは最悪だつたけどね。

「いってきます。」

その言葉に對しての返事はない。前までは、「いってらっしゃい。」の声が聞こえないと部屋中捲しまわって家族を見つけて、無理矢理言わせてた。けど今はそんなことしたって時間の無駄。だつて誰もいないもん。いつからだろ?お母さんが帰つてこなくなっちゃつたの。最初は寂しかつた。去年・・・だから、中1までお母さんと一緒に寝てた私が、今はベッドに一人どころか家の中に一人だよ。不安で仕方なかつた。ま、それも最初だけ。今は慣れっこだ。そつか、あれは12ヶ月前のこと。

- - -

「お母さんー私、13歳になつた記念に一人で寝るー。」

私は自信満々に言つた。それもドヤ顔で。でもお母さんは、

「そう、これで広々寝れるね。」

と、このひとことしか言わなかつた。この時は向とも思わなかつたんだ。

3ヶ月後・・・

お父さんが、仕事から帰つてくるなつて言つた。

「転勤が決まつた。だから・・・。離婚してくれ。」

その時20時で私とお母さんは夕飯を食べていた。お父さんの分もちゃんとあった。

「本気?なんの[冗談?今日はエイプリルフールといりますよ。」

茶化すように私が言つたらなぜか怒られた。え?え?なんで私怒られたのかな?

「・・・分かった。」

はい?分かった? a11 「お母さん?イヤイヤ、我全然分からない。お母さんは何が分かったの?離婚だよ?離れ離れだよ?訳が分からぬよ・・・。

「お母さんーお父さん!なんなの?説明してください。」

私が説明するよう催促すると、お母さんがクリップでつままれたよう開きずらそうな唇を開けて説明してくれた。

「あのね、お父さんはね、私たち以外に大切な人がいるんだって。だから、私達は離れなきや<sup>ちとせ</sup>いけないの。一緒にいちゃいけないの。ずっと黙つてて「ごめんね。千歳はお母さんとずっと一緒にいようね。」

え・・・?私はいまだに状況が理解できない。けど、お母さんは泣いている。もう、それだけでただ事じゃないことが分かった。

「お母さん、泣かないでーお父さん!私たち以外に大切な人がいるつてどうこうこと?」

お父さんは真顔で答えた。

「お父さん、好きな人がいるんだ。でも、お父さんにはお母さんや千歳がいるから・・・。今まで何もなかつた。けど、お父さん、福岡に転勤が決まつたんだ。それで、その人に、「一緒に住もう。」つて言つて。お父さん断れなかつた。だから、こんな中途半端はいけないと思つて、こうすることに決めたんだ。」

お父さんの言葉を聞いて、なぜか悲しいとか、寂しいとか感じなかつた。感じたのは怒りだけ。

「私、13年生きてて、幸せじゃないつて感じたことなかつた。でも今日初めて感じた。ああ、私、不幸だな。つて。こんな父親持つたこと。「うん。そうじやない。ずっと不安でいつぱいだったお母さんの気持ちに気付けなかつたことだよー」この上ない親不孝者になつちゃつたんだよ、私。仕方ないよね、お母さんを幸せにできなかつた者同士一緒にいたつてさ。一度良かつたんだよ。離れることになつて。でも、一緒にしないでよね。お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかつたけど、私はこれからお母さんを幸せにしてみせるんだから！」

そう言い放つた私の目にはもう涙が溢れてたことは言つまでもないよね。私が怒りを感じた相手つて、こんな最低なお父さんにじやなくて、自分自身だったんだね。

お父さんのために用意してあつた夕飯が食べられることがなく冷たくなつて、テーブルの上で佇んでた。

お父さんは家を出て行った。お金のことをせりやんとするみたい。私はよく分からなかつたけど。

その日も、お父さんがいなくなつたこと以外は何も変わらないこの家で、私はお母さんと夕飯を食べた。私の好きな牛丼だつた。紅シヨウガたつぷりの。私はいつもなら、夕飯の時に、その日あつた出来事を話したい放題話していた。お母さんはちゃんと聞いてくれるの。でもね、その日は何も話せなかつた。お父さんのこと以外の話題がなかつたんだ。沈黙が続く。お母さんだから、沈黙しても別に氣まずくはないんだけど、なんか落ち付かなくて牛丼の味が分からなかつた。そんな時、お母さんが何か思い出したように話しだした。

「お父さんがや、離婚の話を出した時、千歳がお父さんになんか話してたよね。あれね、お母さんすゞく嬉しかつた。でもね、千歳はひとつだけ間違えてたよ。『お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかつた。』って言つたでしょ。あれね、違うよ。」

「え・・・?」

「お父さんだつてひとつだけかけがえのないものくれたよ。」

「・・・?」

「千歳だよ。お父さんは千歳をくれたんだよ。ほら、ひとつ幸せくれたよね。」

涙目で話すお母さんの顔を見て、私は大泣きした。さつきまで味のなかつた牛丼が、いきなり塩味になつた。そんな私を見て、おかあ

さんはやさしく笑つてた。

- - -

## ぴーなつつの出合

もう7月。あと2週間で誕生日が来る。去年まで、「たんじょうび」と聞けば、

(プレゼントはなにもらおう?)

それしか考えてなかつた。たつた1年しか経つてないのに、1年前の自分がひどく幼く感じる。いや、大人ぶつてゐわけじゃないんだよ?でもさ、今年は誕生日どころじゃないんだよね。早くお母さんをみつけなきや。」のまおじゅーonely Birthdayになつちやうよ。

## キンコーンカンコーン

鐘が鳴つた。よし、お弁当だ。今日も屋上でランチタイム。屋上とかベタなスポットなのに案外誰も使わないんだよね。あ、みんな教室で食べるもんね。普通は。まあ、いいや。お昼食べよーっと。

風が気持ちいい。空はこんなに晴々としてるのに、私だけ何でこんなにモヤモヤしなきゃいけないの?ほら、さつき教室にいたクラスメイトだつてみんな、何も考へないで、ただ平凡に暮らしてるんだよ。この世に神なんて存在しないんだ。平等なんてありえない。

私は卑屈。妬みっぽくて僻みっぽい。相手に悪く思われたくないから誰にも愚痴など言つたことがない。だけどそれは、“いい子”なんかじやなくていい子ぶつてるだけなんだ。家でも外でも。

いつも屋上に来るといつもこの想ひ。

「なんで私だけ?」つて。

私以外の人もみんなモヤモヤすりやいいんだ。つて……。モヤモヤの原因は大体分かってる。けど、その原因無くモヤモヤする気持ちはないわけじゃないのに、怖くてさ。できないの。

私って可愛そつなのかな……。

もつてお弁当箱を開きもせず、青い空を眺めてただぼーっとしてたら、なにか幻聴のよつたものが聞こえる。

「……うつ?」

なんか男の子のよつた声。低くて。耳をふさごとも聞こえるの。体の底から響いて聞こえてくるの。重低音つて言つのかな?なんか眠くなつてきた。

「ぴーなつつ。だつてばー!」

今度こわはつあり聞こえた。後ろだ。

振り向くとそこには男の子が立つていた。

「な・・に・・・・?」

あれれ?なんで私ビビつてんの?男子苦手だから?いや、そんなことじじゃないな。あ、苦手だけども。

「やつと戻付いた?オレ、9ヶ円も一緒にいたのこな。」

はひ?9ヶ円?

「それって・・・。」

「なに？」

「ストーカー・・・？ひいい〜〜？！」

あらうことか私は取り乱してしまった。

「オレ<sup>が</sup>ストーカー？違<sup>う</sup>よ。ストーカーってあれだろ？あとつけで、電柱<sup>でんちゆう</sup>柱<sup>うば</sup>の陰からこつそり観察<sup>かんさつ</sup>して、家まで着いて行って、そんでもつて盗撮<sup>とうさく</sup>とかしちゃうやつだろ？」

「そうだね。詳<sup>くわ</sup>しいんだね。」

冷めた目で見てやつた。

「だからちげえって。話<sup>はな</sup>しを聞<sup>き</sup>けい！」

とりあえず私はその、“ぴーなつつ男”の話を聞くことにした。

## ぴーなつつのわけ

ぴーなつつの男が話し始める。

「ちゃんと聞けよ？めんどくせえから1回しか言わねえぞ？あのな、9ヶ月前って言つたらさ。率直に言うけどおまえの父ちゃんが出てつた時期だろ？そう、その時くらいからオレはおまえの傍で暮らすことになつたんだ。もちろん見えなかつただろ？今までは。それはおまえの孤独な気持ちが小さかつたからだ。でも今、オレがこんなにハッキリ見えるつてことは・・・。おまえは相当孤独なんだよ。」

苦笑いで話すぴーなつつの男。なぜだか無性にイラついた。

「私孤独じゃないよ！なにそれ！全然孤独じゃない！」

全力否定してやつた。何よこの男は。初対面の人に、孤独だ、孤独だつて。失礼じゃない。

「だから初対面じゃねえーんだつて。」

はい？

「何勝手に人の心読んで！個人情報保護法を無視する気？！」

誰かと話すのなんて久しぶりだつた。だからなぜか私のテンションはおかしかつた。

「おまえのどの辺が孤独じゃないって？」

人の質問は無視かい……。

「どの辺って……じゃ、じゃあ、逆に私のどの辺が孤独なの？」

「んー？ 何個言えばいいんだ？ とりあえずまあ、強いて言つなら……。自分の思つてることちゃんと伝えられない？ つてか伝えられる相手がいないとこかな。」

腕組みしながら、すました顔でいうぴーなつ男。むかつくナビ、まあ、言つてることは正しいかもしれない。私、思つたことどいつもか、会話が出来る相手すらいないもん。

あれ？ なんでかなあ。この人には私、普通にものを言つことできる気がする。やつきもちやんと、

「自分は孤独じゃない。」

つて伝えられた。結果それは間違いだつて気付かされちゃつたけど……。なんか途端にこのぴーなつ男に心開けてきた気がした。

「オレに言つたいこと言つるのはな、オレとおまえはぴーなつだからだ。」

「はあ？」

「ごめん。前言撤回だ。心開けた？ こんな変人に？ ないない。なにがぴーなつ？ つてかどんだけぴーなつ好きなの？ この男は。

「やつば変な顔したな。ははっ。今、意味分かんない奴だつて思つただろ？当然だけどな。」

「・・・。」

「ぴーなつつてさ、どんな状態だ？」

「え・・・？ どんな状態つて？えつと、一つの寒い、一つタネが入つてて・・・。」

「そりやう。そのタネがオレとおまえ。」

「はあい？」

「オレがおまえの傍にいる」とおまえが生まれた時から決まつてた。驚いた？

「おお・・・おふう・・・。驚いた。」

「まだに理解できない・・・。生まれた時から決まつてた？ええつ？！」

「え、でもや、私の傍に来たのは9ヶ月前なんじょ？おかしいじやん。」「

「ああ、傍に来たのはな。でもそれより前からおまえのことは知つてた。」

よく分かんないなあ。なんで9ヶ月前なの？お父さんのことが関係あるつて言つてたけど・・・。

「それはおまえが寂しがつてたからだ。んー、孤独つてやつかな。」

「またそれか。孤独か。つてか人の心をまた読んだのか・・・まあいいや。」

「私が孤独だからアンタは私の傍に来たの?」

「そうやつ。あとさ、オレ、ぴーなつつ男じやない。」

しまつた。この男は心が読めるんだつた。

「じゃあなんていうの?」

「太陽たいよう・・・だよ。」

小さい声で、この目の前にいる太陽は言つた。

「太陽か。ふふ。温かそうだね。」

私がそう言つと、

「あれ?笑わないの?」

「す''く不思議そうな顔して聞いてきた。

「え、 なんで笑うの？」

「ああ、 私も質問返しちゃった。

「うん。 まあいいや。 今度話すよ。 それじゃ、 教室戻るか。

」

「うん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5909z/>

---

おひさまsummer

2011年12月21日20時55分発行